

飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアの現状と課題

原田理人*1 中山昌紀*2

- I 緒言
- II 高地におけるトレーニングの有効性
- III 日本における高地トレーニングエリア
- IV ナショナルトレーニングセンター (NTC) とは
- V 飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアとは
- VI 飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアにおける現状
- VII 飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアにおける課題と将来の方向性
- VIII まとめ

I 緒言

古く律令制に基づいて設置された日本の地方行政区分では、現在の岐阜県を南北に分けられ、それぞれを美濃国(みののくに)、飛騨国(ひだのくに)とされていた。現在の高山市を中心とした飛騨国(ひだのくに)は、東西を険しい山に、南北を厳しい河川峡谷(きょうこく)に囲まれている。盆地は高山、国府、古川盆地があり、幾筋も伸びる谷筋沿いに小さな平地が広がっている。飛騨はその多くが山林であり、その森林率は92.5%に及んでいる。国内における森林率の平均が60%台であることをみても、際立って森林の面積が多い。緑の豊かな飛騨は日本列島のほぼ中央に位置し、高山盆地は内陸性盆地型気候である。

高山市には、東西南北方向に江戸時代の重要歴史街道があるほか、東に朝日町、高根町を通る江戸街道、北に国府町、上宝町を通る越中東・西街道、西に清見町、荘川町を通る郡上(白川)街道、南に一之宮町、久々野町を通る尾張(益田)街道、さらに、丹生川町、上宝町を通る平湯街道も存在する。

また、郊外の旧町村域は、北へ流れる宮川、南へ流れる飛騨川へと流れ込む河川沿いにまとまりをみせ、河川沿いに特徴ある文化が発展をしてきた経緯があり、芸能、民俗、天然記念物、

自然山岳景観などみるべきものも多い。

中でも飛騨御嶽高原は、御嶽北山麓の標高1,200m~2,200mに位置し、旧高根村、旧朝日村から旧小坂町に至るまでの広大な高原地帯で、夏の冷涼な気候と豊かな自然環境に恵まれ、国内でも有数の風光明媚な地域である。この3町村は、高根村と朝日村が2005年2月に高山市と合併して高山市となり、小坂町は下呂市と2004年3月に合併して下呂市となった。御嶽山は、日本における中部山岳地帯の典型的な植生が高山帯から低山帯まで広がり、その垂直分布が成層火山特有の連続的でまとまった形でみられるという学術的にも重要な地域となっている。

ここに整備されている「飛騨御嶽高原高地トレーニングエリア」は、昭和62年、林野庁が「森林空間総合利用整備事業(通称:ヒューマン・グリーン・プラン、略称H・G・P)」を提唱したことを受け、飛騨御嶽高原の地元である高根村・朝日村・小坂町の3町村によって、平成元年に「御嶽森林空間総合利用促進協議会」が設立され、飛騨御嶽高原に広がる国有林の有効活用についての検討が創められたことが発端となった。これらには、「自然遊歩道」や「森林博物館」「クアハウス」などの事業とともに、「チャオ御嶽スノーリゾート」の設置も含まれ、平成10年11月に開業している。

この「チャオ御嶽スノーリゾート」がオープンしたことによって、標高1,800mに設置されたセンターハウスを拠点とした周辺地域の利用が可能となったことから、標高と自然環境に着目した高地トレーニングを目的とした実業団の陸上チームを中心とした来訪者が急増し、本格的な高地トレーニングエリアの整備が進められることとなった。

平成11年には、岐阜県スポーツ科学トレーニ

* 1 岐阜経済大学経営学部教授

* 2 岐阜経済大学大学院経営学研究科修士課程

ングセンター内に「高地トレーニング研究室」が設置され、「高地トレーニング効果に関する研究」について当該地域を調査地点とした実証研究が行なわれている。また、チャオ御岳スノーリゾート・センターハウス内に「東京大学身体運動科学研究室高地トレーニング飛騨御嶽研究分室」が開設されるなど、医・科学面での研究も進められている。平成12年、地元3町村によって「ナショナル高地トレーニングセンター誘致期成同盟会」が設立され、国において設置が検討されている「ナショナル高地トレーニングセンター」の誘致を目標とする統一した要望活動がおこなわれるとともに、高根村において「スポーツと地域づくりシンポジウム」が開催され、翌平成13年には高山市および高根村において、海外から著名なコーチ、研究者を招略し、第一線の日本人コーチ、研究者を交えた「第2回陸上競技の医科学・コーチング国際会議」および「第5回高所トレーニング国際シンポジウム2001飛騨」が同時開催されるなど、高地トレーニング環境創出に向けた動きが活発となっている。平成20年には、国からナショナルトレーニングセンター（NTC）としての指定を受け、本エリアにおける注目度はますます高まりをみせている。

日本全国には飛騨御嶽高原高地トレーニングエリア以外にも、多数の高地トレーニングエリアが存在し、スポーツ合宿などの誘致を行っている。特に山形県の上山市に整備されている「蔵王坊平アスリートヴィレッジ」は、飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアと同様に、NTCの指定を受けている。

しかし、飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアにおいては、利用者数こそ純増の傾向をみせているが、総数はさほど大きなボリュームに育ってはいない。

現状における飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアの活用は、陸上競技における長距離選手中心とした誘致となっており、平成29年度における合宿利用団体の約90%が陸上競技に関するマーケットになっていること、またNTCのブランド力を活用して利用者を増加させたいという趣旨とは裏腹に、NTCは国際競技力向上を

図るトレーニング施設として位置づけられているため、利用対象者は基本的に日本オリンピック委員会（JOC）の強化指定選手及び各中央競技団体の推薦を受けた強化選手となっており、それに準じる選手にも利用制限が生じていることなどが一因と考えられる。つまり今後の利用活性を目指すには、利用者の可能性（対象目的）を拡大するという、マーケットスケールアップや、それに対応できる施設・設備の整備が急務といえる。

しかし、すでに国内における「高地トレーニングエリア」も競合状態にあり、競争原理がはたらいている現状では、安定した集客を担保することもままならないため、新たなマーケットや目的活動を創出していく必要がある。

そこで、「飛騨御嶽高原高地トレーニングエリア」のこれまでと現在の状況を整理し、課題を明確化することで、今後における「飛騨御嶽高原高地トレーニングエリア」活性化の方向性を探るものである。

II 高地におけるトレーニングの有効性

高地トレーニングにおける「高地」とは、標高が高く気圧が低い「低圧低酸素環境」のことを指し、普段生活している平地に比べて体内への酸素供給量が減少する高地に一定期間滞在してトレーニングすることにより、低酸素刺激の負荷を与えることで安静時の呼吸・循環器系の亢進に加え、酸素運搬能力等の能力改善及び向上をもたらしとされている。柳田ら（2012）は、赤血球やヘモグロビンの数が増加し、酸素の摂取能力と供給能力が増大するため、持久力が向上するという医科学的見地からその有効性を説いている。そのため高地トレーニングの効果は、持久系競技種目選手にとって重要であるとされ、後藤一成（2016）の研究では、低酸素環境（高地）でのトレーニングの効果は持久系種目だけでなく、短距離走や瞬間的なパワー発揮型スポーツにも効果的であることが明らかにされており、幅広い種目で成果を上げることができるとされている。

これらのことから、高地トレーニングは様々な種目を集客できる可能性を秘めており、2020年東京オリンピック・パラリンピックを目前に控えた現在において、本トレーニング環境がもたらす可能性に注目が集まっている。

Ⅲ 日本における高地トレーニングエリア

現在日本における高地トレーニングエリアは、飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアを除いて、5箇所整備されており、その内長野県が3箇所、新潟県、山形県で1箇所ずつ整備されている。それぞれの特徴を生かして、多種目に対応できるように、整備が進められている。

その中で、山形県の蔵王坊平アスリートヴィレッジは、飛騨御嶽高原高地トレーニングと同様に「NTC競技別強化拠点」の指定を受けており、さらなる活性化を目指している。

主な高地トレーニングエリアは次の通りである。

1) 長野県菅平・峰の原高原

峰の原高原は、根子岳の中腹、標高1,400m～1,600mにあり、真夏でも最高気温は約28℃。菅平高原に隣接し、サニパークまで約6km、根子岳への登山道やダボスの丘など登り坂も多く、自然に恵まれた地は、長距離トレーニングにも最適である。2004年には日本陸上競技連盟の専務理事桜井氏、金メダリストで参議院議員の荻原健司氏らの監修による「峰の原高原クロスカントリーコース(標高1,494～1,534m)」が完成した。芝舗装のコースはコース幅6m、1周2kmで芝張りの発着所にシャワーとロッカールームのある管理棟に加え、途中で競技監視塔(展望台)、休憩所(あずまや)を設置しており、冬季はクロスカントリースキーコースとしても利用できる。峰の原高原では他にもランニングコースが設定され、高所トレーニングが実施しやすい環境となっている。国内のオリンピック代表選手や実業団、箱根駅伝に出場する大学などが頻繁に訪れており、国内の高所合宿のメッカとなっている。

峰の原高原のパノラマコース(標高1,628～1,658m)は、クロスカントリーコースよりもさらに標高が高く、1周2.2kmのコースとなっている。このコースは、菅平グリーンゴルフ場内を利用しているため、峰の原高原観光協会陸上部会加盟の宿に宿泊限定利用が可能である。

2) 長野県・富士見高原

富士見高原は、入笠山(にゅうかさやま)の山麓に展開するスポーツリゾートである。この山は赤石山脈(南アルプス)の最北部にある山で、いわゆる「南アルプス前衛の山」の一つである。山頂近くまでゴンドラリフトや路線バスが通じており、容易に登頂することができる。

山頂からはほぼ360度の大展望が広がり、南・中央アルプス・八ヶ岳はもとより富士山や、遠くは北アルプスなども望める。周辺には大阿原湿原や入笠湿原などがあり、これらの湿原に自生する植物を楽しむこともできる。

この山の北東側の斜面に富士見パノラマリゾートがあり、冬季はスキーを楽しめる。夏はマウンテンバイクの大会やコースが開放され、クロスバイクで賑わっている。

富士見高原には標高1,250m付近に体育館、テニスコート、サッカーコート、陸上競技場が整備され、学生のサークルや実業団のなどが盛んに訪れており、首都圏から2時間半で行くことができ、中央高速道路から7分というインターチェンジ直結の立地は大きな魅力となっており、近隣には温浴施設や道の駅も存在している。

3) 長野県・霧ヶ峰高原

霧ヶ峰高原は、標高約1,600mの高所にあり、また以前は日本陸上競技連盟の霧ヶ峰合宿所があったことから、日本の高所トレーニングの先進地といえるものである。日本の高所トレーニング発祥の地として、昭和39年に行われた東京オリンピックのマラソン競技に出場した『円谷幸吉』、『君原健二』、『寺沢徹』の3選手も霧ヶ峰高原にある、高所トラックを利用してトレーニングを行ったといわれる。

現在は、トラックだけでなく平成9年10月に

建設されたクロスカントリーコースも併設され、より充実したトレーニングを行うことができる環境が整っている。

4) 新潟県・妙高高原・笹ヶ峰

妙高高原における陸上競技トレーニングの中心拠点である杉野沢は、高所トレーニングの笹ヶ峰クロスカントリーエリアの玄関口であり、実業団や箱根駅伝の強豪チームが集う野尻湖も至近距離に位置している。笹ヶ峰コースの標高は1,300mほどであり、準高所となる。クロスカントリーコースはもちろん、マラソン、長距離、駅伝など各競技へも対応し、陸上競技トレーニング、合宿地として最適な環境である。

平成14年6月には、杉野沢を「ランナーが集う街づくり」とすることを目指し、杉野沢観光協会内に陸上部会が結成された。主に、準高所・笹ヶ峰クロスカントリーエリアの整備、開拓を行い、合宿需要を掘り起こすことで地域産業の振興を目指している。

陸上部会の会員宿泊施設によって、合同合宿が可能な規模を有している。一般ランナーはもちろん、ジュニア、高校、大学、実業団チームの合宿において、それぞれのニーズに的確に対応させるため、リーズナブルな宿泊料金で誘致している。

コースは陸上部会がボランティアで整備を行っており、「笹ヶ峰クロスカントリーコース」使用の申し込みから管理までは「陸上部会会員宿泊施設」が手続きを代行している。その他に公営陸上競技場400mトラック、30kmロードコースもある。杉野沢が誇る絶景地「笹ヶ峰」には総延長距離13.0kmのクロスカントリーコースが整備されており、難易度や距離を自由自在に選択してトレーニングが出来る他、コースの大半は終日直射日光の当たらない最適環境である。

また、杉野沢地区宿泊チームが最優先使用できる特選エリアとして、「笹ヶ峰・ドイツウヒの森コース」が整備され、美しいドイツウヒ(北欧のクリスマスツリー樹)の森の中にほぼ平坦な2.0kmコースで、チップ舗装道が整備されている。

杉野沢を起点とした「ロード走コース(標高600~780m地内)」は、3.0km、8.0km、15.0km、30.0kmなどのロードジョギングコースであり、4.8kmはクロスカントリー芝生道、平成18年6月に折り返し8.0kmのクロスカントリーチップ道が設置された。各コースで充実した整備がされており、近年実業団や学生などの合宿が増えてきている。

5) 山形県・蔵王坊平

蔵王坊平アスリートヴィレッジは、蔵王連峰の中腹・標高1,000mの高原に位置し、夏でも爽やかな気候と弾力性のある土壌特性は、準高所トレーニングの適地として、毎年、陸上競技を中心に多くのスポーツ合宿が行われており、日本で2箇所が指定されている「ナショナルトレーニング施設」の一つである。

アスリートヴィレッジにあたっては、山形県や財団法人日本陸上競技連盟の支援のもと、平成2年に構想の推進母体となる組織を設立し、トレーニング効果調査や整備を進め、ナショナルトレーニングセンターとして認定された。平成9年には、東日本初となる芝の常設クロスカントリーコースと、日本で最も高いところにある全天候型グラウンドが完成し、国際イベントなども開催されている。

平成14年には、最新鋭のトレーニング機器や国内初の室内投てき設備を備えた蔵王坊平総合交流促進施設(上山市)とトレーニングセンター(山形県)「ZAOたいらぐら」がオープンし、名実共に陸上競技の国内強化拠点として、また、各種スポーツ合宿の適地としてふさわしい環境が整っている。

また、財団法人日本オリンピック委員会より、シドニー・アテネオリンピックに引き続き、北京オリンピックでも「陸上競技強化センター」の認定を受けており、陸上競技を中心に、サッカー、バスケットボール、バレーボールなどの競技にも利用が広がりをみせてきている。

上山市に位置する蔵王高原坊平地区は、標高1,000mの高原地帯にあり、トレーニングに適した気象・地質であることから、(財)日本陸上競

技連盟を始めとする陸上競技の方々からトレーニング地としての適地性について注目されており、毎年全国から学生、社会人を含めた多くの選手等が当地を利用しトレーニングを実施している。上市市においては、この動向をより確実なものとし特色あるスポーツリゾート地づくりの手段として活動していくため、これまで山形県と上市市が一体となり、学識経験者による「アスリートヴィレッジ構想研究会」などを組織し、資源評価と整備のための方策を模索しながらアスリートヴィレッジ構想の大綱を取りまとめるとともに、トレーニング効果調査の集大成としての高所トレーニングをテーマとしたシンポジウムを開催しながら、蔵王高原坊平地区を一流のアスリートを始めとするスポーツ関連トレー

ニングのメッカとしての構築に向けての取り組みを進めてきている。

IV ナショナルトレーニングセンター (NTC) とは

ナショナルトレーニングセンター (NTC) とは、日本のトップレベル競技者用のトレーニング施設をさしている。日本におけるNTCの中核施設である味の素ナショナルトレーニングセンターでは、多くの競技に対応できるよう整備されているが、対応できない競技(冬季競技、海洋・水辺系の競技及び高所トレーニング等)については、国が該当施設を「ナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点」として指定し、

図表1：ナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点一覧

	名 称	対 応 競 技
屋 内 系 競 技	堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンター	サッカー
	川崎重工ホッケースタジアム	ホッケー
	御殿場市馬術・スポーツセンター	馬術
	埼玉県長瀬射撃場	ライフル射撃
	神奈川県立伊勢原射撃場	クレール射撃
	熊谷スポーツ文化公園	7人制ラグビー
	フェニックス・シーガイア・リゾート	ゴルフ
	日本体育大学(東京・世田谷キャンパス)	近代五輪
	川崎市港湾振興会館ビーチバレーコート「川崎マリエン」	バレーボール(ビーチバレーボール)
	日本サイクルスポーツセンター	自転車※パラ競技でも指定
冬 季 競 技	フェニックス・シーガイア・リゾート及び周辺エリア	トリアスロン ※パラ競技でも指定
	札幌市ジャンプ競技場(大倉山、宮の森)	スキー(ジャンプ)
	西岡バイアスロン競技場	バイアスロン
	苫小牧市白鳥アリーナ(白鳥王子アイスアリーナ)	アイスホッケー
	明治北海道十勝オーバル(帯広の森屋内スピードスケート場)	スケート(スピードスケート)
	白馬ジャンプ競技場・白馬クロスカントリー競技場	スキー(ノルディック複合)
	長野市ポプスレー・リュージュパーク「スパイラル」	ポプスレー・リュージュ
	長野市オリンピック記念アリーナ「エムウェーブ」	スケート(スピードスケート)
	帝産アイススケートトレーニングセンター	スケート(ショートトラック)
	軽井沢風越公園カーリングホール(軽井沢アイスパーク)	カーリング
海 洋 ・ 水 辺 系 競 技	中京大学アイスアリーナ「オーロラリンク」	スケート(フィギュアスケート)
	和歌山マリーナ(ディンギーマリーナ)	セーリング
	戸田公園漕艇場及び国立戸田艇庫	ボート
	富山市スポーツ・カヌーセンター	カヌー(スラローム)
高 地 ト レ ー ニ ン グ	木場湯カヌー競技場	カヌー(スプリント)※パラ競技でも指定
	飛騨御嶽高原高地トレーニングエリア	高地トレーニング
そ の 他	蔵王防平アスリートヴィレッジ	高地トレーニング
	羽島市防災ステーション	テコンドー ※パラ競技でも指定
パ ラ リ ン ピ ッ ク 競 技	田山射撃場	バイアスロン
	やまびこスケートの森アイスアリーナ	パラアイスホッケー
	田辺スポーツパーク(南紀田辺スポーツセンター)	陸上競技
	庄内温泉筑豊ハイツ	車いすテニス
	ZOZOPARK HONDA FOOTBALL AREA	5人制サッカー
	千葉ポートアリーナ	車椅子バスケットボール
	大阪市舞洲障がい者スポーツセンター	ボッチャ
	京都府立心身障がい者福祉センター体育館	パワーリフティング
	姫路市役所北別館	シットイングバレーボール
	所沢市民体育館	ゴールボール
	立教学院ボール・ラッシュ・アスレティックセンター	水泳(パラ)
	元京都市山王小学校	車いすフェンシング

出典：公益財団法人日本オリンピック委員会

日本の国際競技力向上におけるトレーニング環境として、各競技における選手強化活動の拠点と定めている。それらが高度なトレーニング機能を持った拠点となるよう、機能の高度化や中核拠点との連携・協力を図る必要があるとされており、トレーニングを科学・医学・情報など多角的視点でサポート・強化マネジメントできるような体制が整備されている。

NTCの競技別強化拠点には、各競技に対する審査基準が設けられており、その基準を満たした施設のみが指定を受けることが可能となっている。「高地ナショナルトレーニングセンター(NTC)」の審査条件は、①標高1,500m-2,000mの高地であること、②400m×6レーン以上の全天候型陸上競技施設¹⁾が整備されていること、③バスケットボールコート1面以上が整備されていること、④フリーウエイト²⁾が可能な設備が整っていること、⑤競技者100名以上が宿泊可能な施設があることとなっており、4年毎に再審査が行われ、基準を満たしていない場合は、指定から除外されることになる。

現在では、「冬季競技」、「海洋・水辺系競技」、「屋外系競技」、「高地トレーニング」、「パラリンピック競技」の合計40施設が指定されており、高地NTCの指定を受けているのは、飛騨御嶽

高原高地トレーニングエリアと山形県上山市に位置する蔵王アスリートヴィレッジの2つのみとなっている。(図表1)

具体的に対象となる競技によるトレーニング利用などの現状をみると、スキー競技については、各種目の施設が整っており、年間を通じてトレーニングが行える長野県野沢温泉村の野沢温泉トレーニングセンターを利用しているほか、ボート競技については、JISSとの連携を図りやすくコースの整っている戸田公園漕艇場などを利用している。高所トレーニングの場合、概ね標高1,800m以上でトレーニング環境が整っていることが求められることから、国内では岐阜県の飛騨御嶽高原高所トレーニングエリア、海外では米国のボルダー³⁾や中国の昆明⁴⁾などが活発に利用されている。(図表2)

競技別強化拠点の指定にあたっては、各競技団体における利用の現状や意見等を踏まえることが重要であり、中核拠点との連携・協力が重要であることから、組織体制が整っているか、各設置者における今後の施設整備計画がどのようになっているかなどの点についても考慮する必要がある。

さらに、競技別強化拠点として指定された施設については、高度なトレーニング機能を持つ

図表2：主な高地トレーニング拠点と飛騨御嶽高原の主要拠点標高

標 高	高地トレーニング拠点 海外	高地トレーニング拠点 国内	飛騨御嶽高原
4,400m～ 2,400m	【バイクス・ピーク】 コロラド/米国/4,400m 【青海湖】 中国/3,000m 【ラムサウ】 オーストリア/2,700m 【ダッハ・シュタイン】 オーストリア/2,300～2,700m	【富士山】 2,500(5合目)～3,500m 【乗鞍岳】 肩の小屋付近ほか 2,500～3,000m	【御嶽山】 山頂 3,067m
2,400m～ 1,900m	【多巴高原】 中国/2,360m 【ガニソン】 コロラド/米国 2,350m 【シェラネバダ】 スペイン/2,300m 【アラサモ】 コロラド/米国 2,300m 【メキシコシティ】 メキシコ/2,300m 【フラッグスタッフ】 アリゾナ/米国 2,150m	【立山】 天狗平・室堂付近 2,000～2,350m 【横手山・洪峠】 2,170m 【草津白根山】 2,000m 【しらびそ高原】 1,800～2,000m	【チャオ御岳スノーリゾート】 ゴンドラ山頂駅 2,200m
1,900m～ 1,600m	【昆明】 中国/1,900m 【コロラドスプリングス】コロラド/米国 1,800m 【フォン・ロミュ】 フランス/1,800m 【ボルダー】 コロラド/米国/1,800m 【サンモリッツ】 スイス/1,800m 【ラ・セージ】 フランス/1,600～1,800m		【チャオ御岳スノーリゾート】 センター施設群 1,800m 【胡桃島】 1,800m 【濁河温泉】 1,800m
1,600m～ 1,300m	【セント・ヤコブ】 イタリア/1,388～1,480m	【霧ヶ峰高原】 1,600m	【千町牧場】 1,600m
1,300m～ 1,000m		【菅平高原】 1,200～1,300m 【蔵王坊平高原】 1,000m	【オケジッタ・日和田】 1,300m 【鈴蘭高原】 1,200m

出典：飛騨御嶽高原高地トレーニングエリア (2005)

た拠点とするため、スポーツ医・科学情報の提供等、中核拠点とのネットワーク化を図る必要があるとともに、トレーニング拠点としてより効果的にトレーニングが実施できるようにするため、設備の充実が必要になる場合があると考えられる。

こうした点を踏まえ、今後文部科学省において、指定された強化拠点への支援方策を含めた指定の具体的な在り方について、財団法人日本オリンピック委員会(JOC)や独立行政法人日本スポーツ振興センター(NAASH)等関係機関と連携を図りながら、検討を進めていく必要がある。

V 飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアとは

岐阜県御嶽山麓の高原地域は、自然環境と豊富な観光資源に恵まれている。清らかな河川、豊富な森林など、美しく豊かな自然環境は、全国的に評価されるところとなっていることは改めて説明を必要としない。そのような特殊な環境に位置する飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアは、岐阜県高山市と下呂市にまたがる高地トレーニング施設であり、現在強化指定選手や実業団チーム、大学生、高校生などの合宿地として活用されている。

その御嶽山の岐阜県高山市に位置する高根村では、1990年(平成2年)頃から年々の人口減少に伴い、地域の過疎化が進み地域の衰退が問題視されていた。平成2年に913人であった人口が、20年後の平成22年には474人まで急激な減少傾向にあったことから、この状況を打開するため、高根村が御嶽山の高地環境という特徴を活用した「地域興おこし」を目的とし、高地トレーニング施設の整備が始められた。その当時岐阜県は、「スポーツ王国ぎふ」づくり⁵⁾の一環として高地トレーニングに注目しており、高地トレーニングに関する研究機関を設けるなどして整備が進められた。

それに続いて高山市朝日町(旧朝日村)や下呂市小坂町も整備を始め、御嶽山麓に高地トレ

ニングエリアが形成された。

その後、2000年(平成12年)頃から実業団チームなどの高地トレーニングが本格化し、これを受け、トレーニングコースの増設、全天候型陸上競技場(日和田ハイランド陸上競技場)の新設を行い、トレーニング施設の整備を加速させていった。

しかし、2005年(平成17年)に行われた平成の大合併により、高根村、朝日村を含む7村と久々野町、国府町の2町が高山市となり、小坂町は下呂市へと併合され、高地トレーニングエリアの整備は、高山市と下呂市へと引き継ぐ形となり、高山市と下呂市により整備が進められた。その結果、2008年(平成20年)に文部科学省からナショナルトレーニングセンター(NTC)の指定を受けることとなった。

この飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアは、主に4つのゾーンに分かれており、ゾーン毎に標高や設備内容、宿泊施設などが異なるため、利用者の目的に合わせたトレーニングが可能になっている。その中の「オケジツタ日和田ゾーン」と「濁河温泉ゾーン」には、トレーニングの拠点となるトレーニングセンターが整備されている。前者は標高1,300m前後であるのに対して、後者は標高1,800mに位置しているため、競技者のレベルや順応させる過程で棲み分けて活用することが可能である。

このような標高が1,800m以上のトレーニングセンターは国内随一であると共に、世界的に見ても希少な環境である。中国の昆明は標高1,880m、スイスのサンモリッツ⁶⁾は標高1,800m、米国のボルダー(は標高1,650mであり、世界的に有名な高地トレーニングセンターと同等またはそれ以上の環境を有している。以下(図表3、4)に各ゾーンの詳細をまとめる。

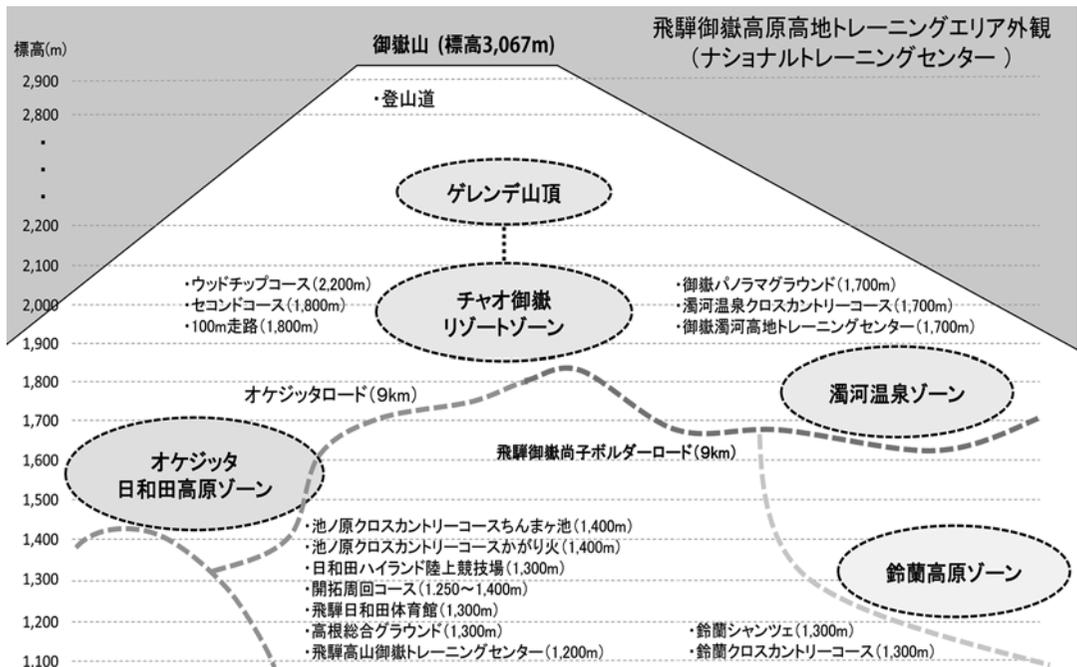
チャオ御嶽リゾートゾーンは、標高1,800~2,200mに位置しており、1周400mの高低差があるウッドチップコース、1周1kmのウッドチップコース、短距離選手のための全天候型100m走路3レーン分が整備されている。その中の「飛騨高橋尚子ボルダーロード」は、岐阜県出身でアメリカのボルダーで高地トレーニングを行

図表3：飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアにおける各ゾーンの詳細

	チャオ御嶽リゾートゾーン	オケジッタ日和田高原ゾーン	鈴蘭高原ゾーン	濁河温泉ゾーン
所在地	高山市	高山市	高山市	下呂市
標 高	1,800~2,200m	1,200~1,800m	1,300~1,400m	1,700~1,800m
設 備 内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ウッドチップコース(山頂駅・センターハウス) ・セコンドコース ・オケジッタコース ・100m走路 ・飛騨御嶽尚子ボルダールード 	<ul style="list-style-type: none"> ・池之原クロスカントリーコース(かがり火・ちんまヶ池) ・日和田ハイランド陸上競技場 ・開拓周回コース ・飛騨日和田体育館 ・高根総合グラウンド ・オケジッタロード ・飛騨高山御嶽トレーニングセンター 	<ul style="list-style-type: none"> ・芝のランニングコース ・自転車トレーニングコース 	<ul style="list-style-type: none"> ・御嶽パノラマグラウンド(全天候陸上競技場 ジョギングコース) ・濁河温泉クロスカントリーコース(一周1.3km) ・御嶽濁河高地トレーニングセンター(体育館、室内トレーニング室)
利 用 料 金	全コース無料	<ul style="list-style-type: none"> 日和田ハイランド陸上競技場 団体：午前 3,080円 午後 4,110円 全日 6,170円 個人：200円(小中高生50円) 飛騨日和田体育館 全面：利用料 820円 照明料 510円 半面：利用料 410円 照明料 250円 高根総合グラウンド 全面：午前 3,900円 午後 5,140円 全日 7,810円 半面：午前 1,950円 午後 2,570円 全日 3,900円 池之原クロスカントリーコース 開拓周回コース オケジッタロード ・利用料金：無料 	全コース無料	<ul style="list-style-type: none"> 御嶽パノラマグラウンド 団体：午前 15,000円 午後 15,000円 個人：200円 濁河温泉クロスカントリーコース 無料 御嶽濁河高地トレーニングセンター ・体育館 県内高校生以下 620円/1時間 その他の団体 1,030円/1時間 ・トレーニング室 県内高校生以下(1人) 500円/1時間 その他の団体(1人) 1,000円/1時間
宿 泊 施 設	<ul style="list-style-type: none"> ロッジチャオ ・収容人数：46名 ・合宿料金：1人1泊3食 6,990円 胡桃島キャンプ場 ・収容人数：42名 ・合宿料金：1棟1泊 18,000円 	<ul style="list-style-type: none"> 飛騨高山御嶽トレーニングセンター ・収容人数：28名 ・合宿料金：1人1泊 1,020~2,050円 スポーツイン・オラ ・収容人数：100名 ・合宿料金：1人1泊3食 6,480~8,640円 チャオ御嶽山荘 ・収容人数：54名 ・合宿料金：1人1泊3食 5,940円 日和田高原ロッジ ・収容人数：110名 ・合宿料金：1人1泊3食 6,500~7,500円 	<ul style="list-style-type: none"> 民宿・旅館・ペンション(11施設) ・民宿・旅館：1人 7,350円から ・ペンション：1人 8,000円から 	<ul style="list-style-type: none"> 御嶽濁河高地トレーニングセンター ・収容人数：159名 ・合宿料金：1泊1人3食 7,450円~10,450円 湯の谷荘 ・収容人数：35名 ・合宿料金：1泊1人 8,150円 濁河温泉ロッジ ・収容人数：50名 ・合宿料金：1泊1人3食 8,000円 旅館御嶽 ・収容人数：120名 ・合宿料金：1泊1人3食 9,330円

出典：飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアHP

図表4：飛騨御嶽高原高地トレーニングエリア (NTCエリア)



い、シドニーオリンピックで金メダルを獲得した高橋尚子を飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアのシンボルのような存在として、その功績を讃えるとともに高地トレーニングのメッカとなるようお願いをこめて命名された。宿泊施設としてロッジチャオ、胡桃島キャンプ場合わせて88名の宿泊が可能となっている。

オケジツタ日和田高原ゾーンは、標高1,200～1,800mに位置しており、400m×6レーンの全天候型陸上競技場(日和田ハイランド陸上競技場)、バスケットボール、バレーボールコート1面、バトミントンコート6面の広さの体育館(飛騨日和田体育館)、サッカーや野球、投擲練習が可能なグラウンド(高根総合グラウンド)、アスファルト舗装の1周8kmコース、赤土を固めた1周1.5kmのクロスカントリーコース、白樺林に囲まれた1周2kmのクロスカントリーコースが整備されている。

また高地トレーニングの拠点となる飛騨高山御嶽トレーニングセンターがあり、医科学トレーニング機器⁷⁾が完備されているため、コンディションチェック⁸⁾に最適であることに加え、高気圧キャビン⁹⁾や低酸素室¹⁰⁾、フリーウエイトスペースなども完備されている(国が指定している強化選手のみ使用可能)。トレーニングセンター内の収容人数は28名であり、その他の民間宿泊施設を含めるとさらに250名ほどの宿泊が可能となっている。

鈴蘭高原ゾーンは、標高1,300～1,400mに位置しており、芝生のクロスカントリーコースが整備されており、宿泊施設は民間の施設があるのみとなっている。

濁河温泉ゾーンは、標高1,700～1,800mに位置しており、400m×6レーン全天候型陸上競技場(御嶽パノラマグラウンド)、1周1.3kmのクロスカントリーコースが整備されている。

また飛騨御嶽高地トレーニングエリアのもう一つの拠点となる、御嶽濁河高地トレーニングセンターには科学トレーニング機器、高酸素カプセル¹¹⁾3台、低酸素室2台、トレーニングマシン、エアロバイク¹²⁾、フリーウエイト機器などを完備したトレーニング室が整備されており、

収容人数は150人となっている。その他に民間の施設としてさらに200名ほど宿泊可能なエリアとなっており、濁河温泉ゾーンでは合計350名が宿泊可能となっている。

このように飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアは、陸上競技場やクロスカントリーコースなどの設備が中心であるため、マラソン選手など心肺持久系の能力が直接的に競技成績を左右させる種目の選手にとっては良い環境となっている。しかし、サッカーや野球、ラグビーなどの屋外球技種目や室内競技など他のスポーツ種目の利用者が利用した際に、トレーニング環境が整っているとは言い難い現状である。さらに、宿泊施設や収容人数には限りがあり、夏場の合宿シーズンになると、実業団や学生の駅伝チーム等の利用が増えてくるため、他のスポーツ種目の利用や宿泊施設に限界が生じている。

VI 飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアにおける現状

1) 飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアの管理構造

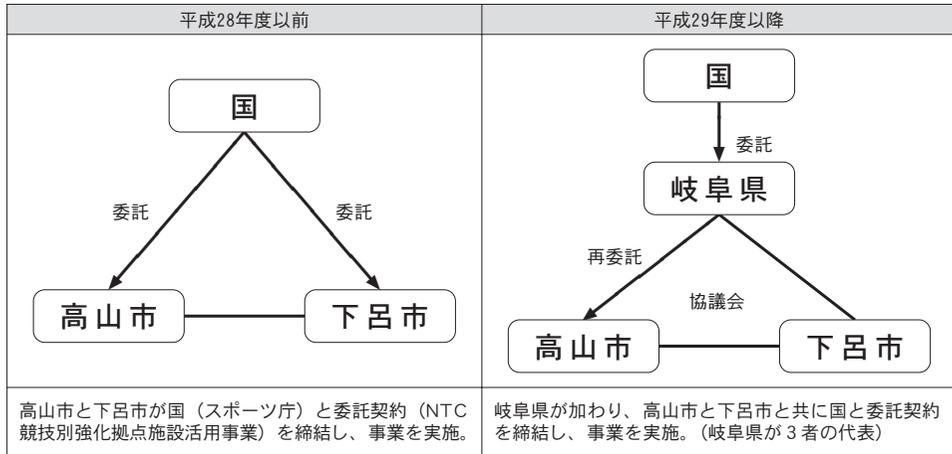
飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアが、平成20年度に国からNTCの指定を受けた当初は、国が維持管理を行っていたが、後にNTC競技別強化拠点施設活用事業として高山市と下呂市が委託契約を交わし、平成28年度まで高山市と下呂市それぞれが国と直接連携を取りながら管理運営事業を行っていた。

しかし、平成29年度からは、岐阜県が加わり、高山市、下呂市と共に国と委託契約を締結し、事業を実施することとなったため、岐阜県が3者の代表となって国から委託を受け、それを高山市へ再委託するという構造となっている。

つまり、国との直接的な窓口は岐阜県となっており、エリアの受け入れ業務は御嶽濁河高地トレーニングセンターに常駐する岐阜県派遣の専門職員が行っているが、実質的な管理運営は再委託を受けている高山市が行っている。(図表5)

下呂市に位置する御嶽濁河高地トレーニング

図表5：飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアにおける管理運営受託形態の変化



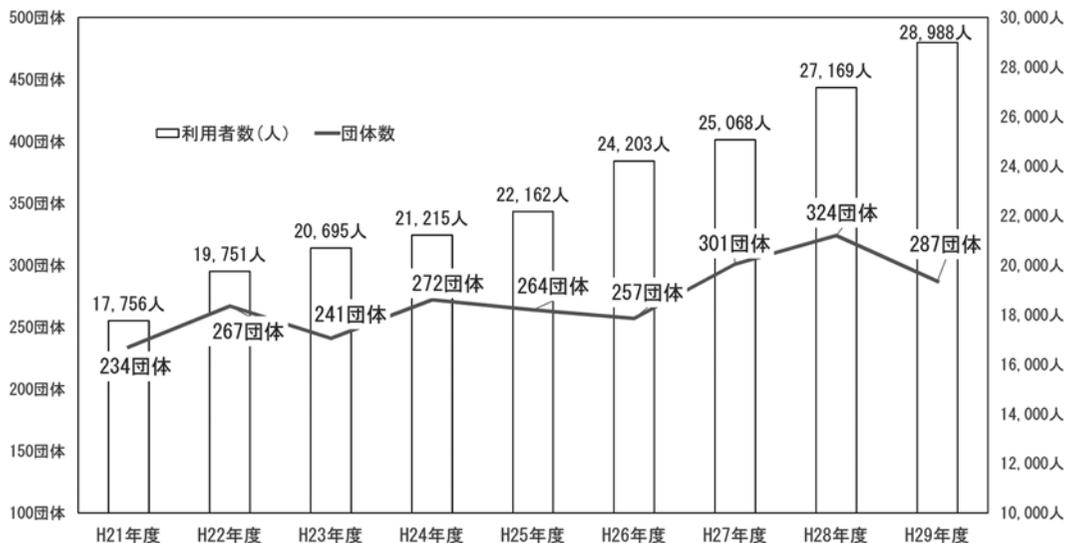
センター（当時濁河温泉高原スポーツレクリエーションセンター）は、岐阜県の施設であり、平成28年度までは下呂市が県より指定管理者として受託していたため、NTC競技別強化拠点施設活用事業にも関与していたが、平成29年度からは公益財団法人岐阜県体育協会が新たな指定管理者として運営を行なっている。そのため平成29年度以降、下呂市はNTCの運営には関与せず、飛騨御嶽高原ナショナルトレーニングエリア推進協議会の構成としてのみの関与となっている。

2) 飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアにおける利用者の現状

飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアの利用者数は、NTCに指定された平成20年度から平成29年度までは増加傾向にあり、9年間で約63%の増加率となっている。それに伴って、利用団体数も増加傾向にあるが伸び率は低く、約23%にとどまっている。

その要因としては、高地トレーニングの効果を考えるならば、一定期間の滞在を必要とするため、現状の宿泊環境では、受け入れ可能な団

図表6：飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアにおける利用者数・団体数



出典：高山市

体数にも制限が生じる結果となっていると考えられ、現在の利用者数は増加傾向にあるが、今後は鈍化傾向となっていくと予想される。(図表6)

3) 蔵王坊平アスリートヴィレッジとの比較

国内だけでなく、世界的にも希少な環境を有している飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアであるが、その活性化の実態は道半ばである。図表7でも示しているように、同じ高地NTCのブランドを受けた山形県上山市に位置する蔵王坊平アスリートヴィレッジと利用者数を比較すると、明らかな差が生じていることがわかる。(本書では利用者数を活性化の1つの指針として捉えることとする)

蔵王坊平アスリートヴィレッジの標高は1,000mほどであり、飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアに比べても高度は低いが、施設における可能競技内容が多種目に渡っている。その施設・設備内容としては、1周3kmのクロスカントリーコース、バスケットボール及びバレーボールコート1面とトレーニング室がある体育施設(ZAOたいらぐら)、1周400m×8レーンの全天候型陸上競技場で、内側は芝生になっているため、サッカー等の球技に使用可能なグラウンド(蔵王グリーングラウンド)、サッカーやラグビー、野外コンサート、射撃など多目的に使用することができるイベントスペース(蔵王猿倉イベントパーク)が整備されている。またテニスコートは現在計画中であり、陸上競技だけでなく、多種目に対応した設備が整備されている

ことがわかる。宿泊施設としては、ペンションや旅館、ホテルなどを含め多くの施設が点在しており、宿泊可能人数は、高地トレーニングエリアに比べて多く存在している。

また施設の全体像を見ると、アスリートヴィレッジはコンパクトに整備されており、活動拠点から宿泊施設までの距離が近いため、活動拠点から宿泊施設まで自家用車での移動が必要になる高地トレーニングエリアと比べると、利用者の利便性が高い。

飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアの方が高度において、蔵王アスリートヴィレッジよりも優れた高地環境を有しているが、想定されているマーケットや宿泊可能人数、利用者側の利便性などの視点においては劣りする結果となっている。

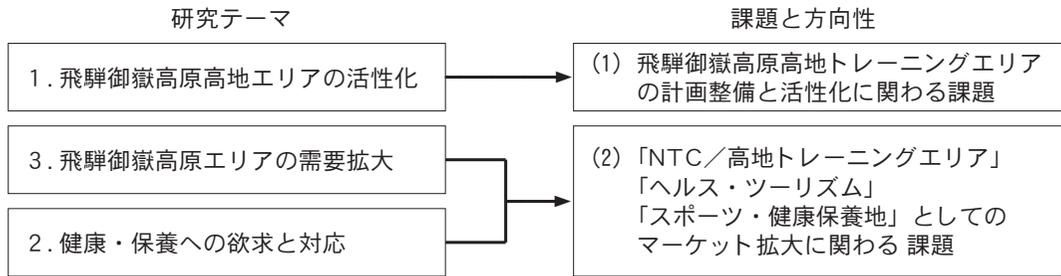
VII 飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアにおける課題と将来の方向性

1) 地域分析からみた方向性の整理

課題の明確化、対策や方向性検討の前提として現在の状況から様々な課題を整理し、現状における改善や対策の必要性をふまえ、将来における方向性を見出すものである。また、おおよそ15年以上が経過している「いやしの里・南飛騨健康保養地計画構想」¹³⁾などについても、同様に明確な計画の推進がみえてこない状況から、これら「健康保養地」といった方向性をにらみながら飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアの地域独自の方向性を探る。

図表7：NTCに指定された高地トレーニングエリアの比較(H27)

	飛騨御嶽高原高地トレーニングエリア	蔵王坊平アスリートヴィレッジ
利用者数	25,068人	60,000人
標高	1,200m~2,200m	1,000m前後
全体像	広範囲	コンパクト
設備内容	トレーニングセンター：2施設 ランニングコース：10コース グラウンド：3面 体育館：1施設	トレーニングセンター：1施設 クロスカントリーコース：1周3km グラウンド：4面 体育館：1施設
競技内容	屋外：陸上、クロスカントリー サッカー、野球 1面 屋内：バレーボール、バスケットボール、レスリング等 (アリーナスポーツ)	屋外：サッカー、ラグビー 3面 陸上、クロスカントリー、射撃 等 ※テニスコート計画中 屋内：バレーボール、バスケットボール、バドミントン 等(アリーナスポーツ)



(1) 飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアにおける環境整備の進行

飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアにおいては、多くの整備課題を残しながらも一定の漸増となっている。飛騨御嶽の高地トレーニングエリア整備は未だ道半ばであることや、集客施設、宿泊施設などが不足しており、純粋に「走るため」のみの整備以外はサービス施設も不足気味であるほか、トレーニング設備も十分ではないことから、日本で随一の高地トレーニングエリアを標榜するには、満足できる機とは言い難い。今後も需要をふまえた整備計画策定の必要

性や現状の利用状況に基づいた整備を進めると共に、「ナショナル高地トレーニングセンター」としてのブランド力を生かしていく必要がある。

また、現在高地トレーニングを実施しているのは、陸上競技の長距離選手が大半を占めており、それ以外の種目はクロスカントリースキーなどが中心となっている。しかし、今後の利用促進を図るためには、対応競技種目の拡大を図ることが求められる。(図表8)

効率的に合宿人口や活動人口を増やすには、チームスポーツ種目の誘致を進めることが望まれるが、チームスポーツは、戦術・戦略を重視

図表8：有望活動種目の一覧

対応種目	方 法	エ リ ア	仕 様
クロスカントリースキー	ローラーブレード、インラインスケート	チャオ御嶽リゾートゾーン付近 その他エリア内主要ロード	アスファルト、オールシーズン走路仕様
モトクロス	モトクロス対応コース設営	鈴蘭高原ゾーン	ジャンプ台などを含めたコース設置、大会誘致も視野に
サイクルクロス	サイクルクロス対応コース設営	鈴蘭高原ゾーン	様々なコース仕様を備えたロングコース仕様で大会誘致も視野に
カート	新たにカートコースを設営	鈴蘭高原ゾーン	様々なコース仕様を備えたロングコース仕様で大会誘致も視野に
アマレスリング	廃校体育館を専用マットに変更	オケジッタ・日和田高原ゾーン	専用マットを設置し、常設対応とする シャワー・ロッカー等の設置も必要
柔道	廃校体育館を柔道畳 (タイムリー) に変更	オケジッタ・日和田高原ゾーン	専用畳を設置し、タイムリーに対応する シャワー・ロッカー等の設置も必要
ボクシング	廃校体育館に専用リングを設置	オケジッタ・日和田高原ゾーン	専用リングを設置し、タイムリーに対応する シャワー・ロッカー等の設置も必要
アーチェリー	旧スキー場を利用	オケジッタ・日和田高原ゾーン	安全に考慮し、山手に向かって射るように設置する
弓道	旧スキー場、もしくは廃校体育館を利用	オケジッタ・日和田高原ゾーン	弓道場として新規に建設する 体育館の場合は専用リフォーム必要
クレール射撃	旧スキー場を利用	オケジッタ・日和田高原ゾーン	山林6～7ヘクタールをシートで覆うこと
ハングライダー	旧スキー場及び既存スキー場の夏場活用を検討	オケジッタ・日和田高原ゾーン チャオ御嶽スノーリゾート 濁河温泉ゾーン	初心者用トレーニングとして利用、体験利用、スクール利用を検討
パラグライダー	旧スキー場及び既存スキー場の夏場活用を検討	オケジッタ・日和田高原ゾーン チャオ御嶽リゾートゾーン 濁河温泉ゾーン	初心者用トレーニングとして利用、体験利用、スクール利用を検討
ラフティング	周辺河川及び貯水池など	高根乗鞍湖、飛騨川など	大型のゴム製ボートで急流を下る 急流がなければぶ下りも検討
フィールドアスレチック	旧スキー場を利用	オケジッタ・日和田高原ゾーン	25ポイント～30ポイントのフィールドを コース別に2～3コース

するものが多く、高地適応などへの価値観は未だ薄いといえる。

今後における高地トレーニング需要の拡大は、個人競技のみならず団体競技へのマーケット拡大が求められるため、個人競技、団体競技における統括団体(中央、地域、県など)、もしくは学校の部活動、大学や社会人競技団体などの合宿を誘致することが必要である。

近年、柔道連盟やレスリング協会が高地トレーニングの効果に注目しており、すでに合宿の実績をつくっている。今後はサッカー、バスケット、水泳などのほか武道や格技系にも可能性があると思われる。

今後の施設整備状況については、整備計画などに基づいた計画手順によって進められていくことが求められるが、既存資源を利活用することも検討される。既存の施設としては、すでに体育館、トレーニングルームなどが整備されているが、屋内施設が不足していることは否めない。

レスリング日本代表などは、1990年に廃校を改修した新潟県の十日町市の桜花レスリング道場で合宿を行なっているが、高地トレーニング効果という付加価値によっては、レスリング競技も誘致できる可能性をもっている。すでに合宿の実績はあるが、レスリングは特殊なマットを敷きつめることになるため、常設となる可能性が高い。常設では他への転用は困難になるが検討には値すると思われる。

また柔道などは、畳の対応ができれば日本で最も高地にある柔道場が出現する可能性があるほか、バドミントンなどでも今日の試合展開では、長く続くラリーを制する者がゲームを制するといった視点もある。さらにサッカーなどでも南米の高地エリアの国との試合には明らかな影響が出ることが知られており、活用の可能性は大きい。

飛騨御嶽高原が有する地形的・標高的特性、優れた自然環境を活かした国内唯一の高地トレーニングエリアとして、様々な交流を促進し、最先端のスポーツ医学・研究活動を推進するスポーツ医学・研究の拠点を目指す。わが国における数少ないトップアスリートから高齢者、機能障

害者までのリハビリ・ヘルスケア機能までを充実させ、温泉、薬草など地域資源を総動員した機能回復(リハビリテーション・リコンディショニング)機能を構築することが有効であるため、不足する「一般利用者の充実化」という視点における環境整備と活動誘致を目指す。

(2)「ヘルスツーリズム」「スポーツ・健康保養地」としてのマーケット拡大

今日の「健康ブーム」「長寿社会の到来と少子化」「健康保養文化の浸透」を背景に、国内では「ヘルスツーリズム」「健康保養」などの需要が拡大している。しかし、現状における「飛騨御嶽高原高地トレーニングエリア」では、一般人に対する健康保養や利用は想定されていない。

高地トレーニングエリアにおいては、トップアスリートに対する機能整備や対策のみでは、エリアの活性化に大きな変化を期待することができない。

飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアにおいては、10月～11月が閑散期となっているが、この時期の高山市内においては最も多い観光入客がある。高山市の祭事などとも関連させながら飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアにおける滞在を促進するような誘客手段も検討される。

つまり、アスリートでは埋めきれない部分は、一般の観光(健康保養)誘客で補うことを検討することが有効であると考えられ、目的が明確な来訪や滞在の誘致には、安定した入込みを実現してくれる可能性がある。こういった背景から飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアの誘客マーケットは、アスリートから一般(健康保養)へのマーケットスケールアップが閑散期を埋め、更なる入込み数の増加を可能にすると考えられる。

一般観光客による「健康・保養」をテーマとした「ヘルスツーリズム」を促進するためには、健康増進施設等の整備が必要になる。さらに、各種イベントの誘致促進やスポーツ・リハビリ機能を備えた施設等の整備によって、さらなる需要の拡大が望めると考えられるが、こういった環境や施設は十分な整備が進められていない

ため、一般需要の受入れは、隣接する自治体との連携や提携などによって不足分の解消を目指すことや、将来的な環境整備の検討が望まれる。なお地域振興の視点からすれば、滞在による経済効果を見込むことから、滞在型の活動誘致を基本として考えなくてはならないため、「滞在環境の充実」という課題は、解決必要性項目の上位に位置付けられるものである。

これまで飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアの整備においては、「岐阜県総合計画」「南飛騨国際健康保養地構想」等を基本として進められてきているが、将来に向かっての方向性としては、新たな視点を必要としており、広大な原生林を持った山岳景観を特色とする「御嶽山県立自然公園」（面積4,276ha、内特別地域2,397ha、普通地域1,879ha）という日本でも屈指の自然環境資源を活かした「スポーツ・健康保養」の目的に応じた利用ができる環境やソフトを目指していくことを基本とし、飛騨御嶽高原地域の活用が様々な人々の交流や保養を実現する拠点となるよう整備するものとして、日本で随一の『スポーツ・健康保養エリア』を目指していくことが求められる。

つまり本エリアを、単なる「高地トレーニン

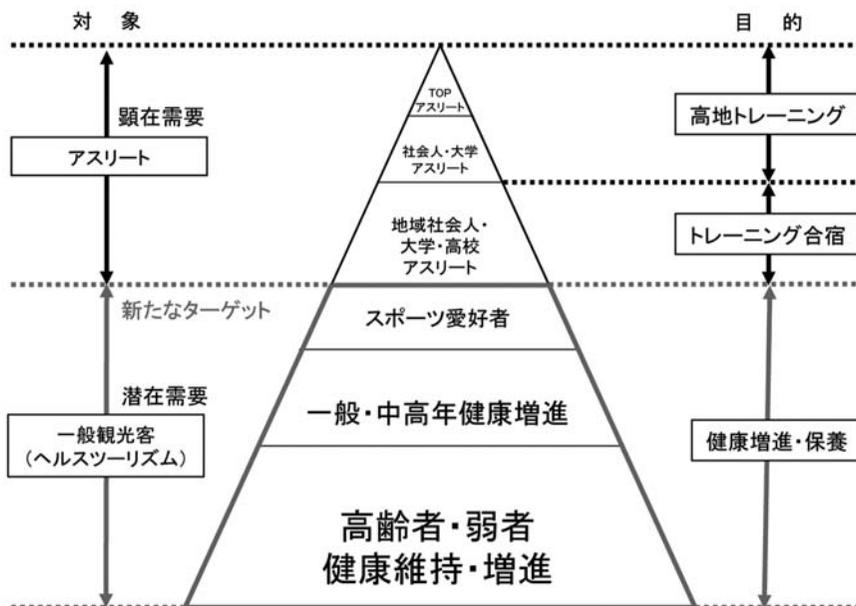
グエリア」の単機能としてではなく、広く中高年の方々の「スポーツ・健康保養地」としての機能充実を目指していくことが有効であると考えられる。

基本的な拠点整備のポイントは以下の通りである。

- 国民の新しい健康ニーズに対応した、県民や国民の健康づくりにおいて先導的な役割を果たす日本一の「健康保養・健康づくり」の中核拠点
- 活動環境のみならず、伝統医学に関する情報なども積極的に発信し、交流を促進する国際的な拠点
- 暮らしに関わる生命文化を提唱し、創造する拠点
- 国内唯一の高地トレーニングエリア（NTC）を有した最先端のスポーツ医学・研究の拠点

このようなポイントを考慮した上で、整備を進めていき、「飛騨御嶽高原エリア」を、アスリートや高地トレーニング合宿などの特定需要のみならず、マーケットボリュームの大きい一

図表9：目的別のマーケットボリュームと新たなターゲット



一般観光客（スポーツを目的としない健康増進目的の中高年など）まで、年齢的の幅は子供からお年寄りまでを対象としたマーケットスケールアップを目指していくことが必要であるといえる。（図表9）

国民の新しい健康ニーズに対応した、「健康づくりの先導的な役割」を果たすため、域外からの健康・保養活動の誘致を進め、日本一の「健康・保養」に関する中核拠点を目指し、新たな需要を掘り起こすことで、高山市、下呂市などの観光誘客への相乗効果を期待することが可能となる。

そのためには、以下のような機能が求められる。

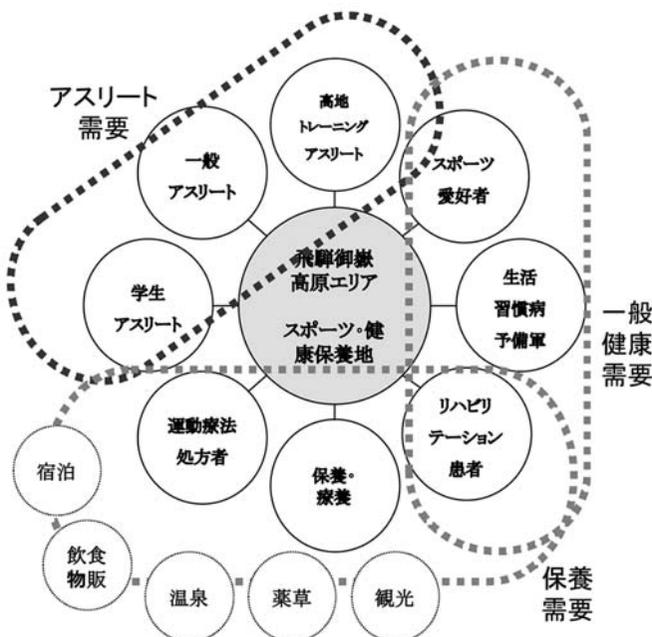
- ①国民の新しい健康ニーズに対応した健康づくりを学習し、実践する機能
- ②各種健康づくり指導者等、マンパワーを養成・確保する機能
- ③健康づくり活動を広く展開するため、健康づくり情報を収集・提供する機能
- ④独創的な健康づくりプログラムを研究・開発し、県内外に発信する機能

このように、さらなるマーケットを拡大するため、「ヘルスツーリズム」という拡大視点をを用いることで、その需要を一般の中高年にまで広げることが望ましい。

積極的にプロモーションを行っていくエリアとしては、競合となる高地トレーニングエリアがない東海地方と関西地方が有力であり、その対象となる中高年人口（40歳以上）は、合計で2千万人をを超えていると考えられる（平成27年度）。「スポーツライフに関する調査2016」によれば、「よく行った」運動・スポーツで利用した施設の種類（年代別）で、40歳以上の「高原・山」という項目の利用率は、10.8%であった。ここ数値から算出した結果、東海地方と関西地方の40歳以上で「高原・山」を運動・スポーツで利用する可能性のある人口は、約230万人にのぼると推測される。これまでの利用状況（図表5）から「飛騨御嶽高原高地エリア」の利用者は、約3万人であるが、このように一般への利用促進を図る（図表10）ことで、利用対象人口を格段に増加させることが可能となると考えられる。

そのためには、アスリート、スポーツ愛好者

図表10：『スポーツ・健康保養地』としてのターゲットと機能



や健康維持としての利用者、健康保養地としての利用者などそれぞれのターゲットに合わせた施設機能を整備し、それに付随して宿泊・飲食、販売・温泉などの機能も充実させ、観光へと繋がられる体制を整えていくことが必要であるといえる。

VIII まとめ

今後、飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアがスポーツ合宿地としての完成度を高めていくためには、「滞在環境」「活動環境」「その他付帯環境」など総合的な機能環境の整備が求められる。

また、合宿地としての活性を目指すのであれば、様々なスポーツ団体の異なる競技特性に対応していくことが必要である。当該地域のように特殊環境下における合宿地では、目的とする機能施設やトレーニング施設までの距離が遠かったり、集団輸送機能の不備、または緊急性の強いアクシデントに対する十分な機能を備えていなかったりすることがある。このようなサービス体制を改善し、安心して合宿を実施できる環境とするためには、施設環境の整備のみに止まらず、様々な要望や問題に対応できる組織機能を含め、地域内のサービス体制を構築しなければならない。さらに、長期間の滞在トレーニングにも十分耐えられる活動受入れ能力や、それぞれの団体にとって効果的なスケジュールを消化させるため、施設利用を調整したり、タイムリーな要望、アクシデントなどに対応したりするための総合的な対応窓口の設置が必要である。各ゾーンで出される要望も決められた窓口によって対応されることで、単独の施設によって生まれる不合理も解消可能になると考えられる。

また天候、利用状況、サービス内容などの情報提供など、高度・多様化する競技ニーズに対応できる滞在環境の整備が望まれるため、一般的に受入れ側の整備コスト負担が通常施設管理レベルよりも膨らむことも予想される。特に高地トレーニングは、特殊環境における適応効果を上げていかなければならないため、トレーニ

ング内容や進行管理も非常にデリケートなものとなり、通常の合宿以上にシビアな整備環境を求められる可能性がある。

このように「高地トレーニング施設」としての機能は多岐にわたるため、一般的な都市部のスポーツ合宿機能や単一競技種目の高地トレーニング機能のみの整備では、多くの競技団体による思惑を満足させることができない。滞在型のトレーニング施設としての機能は、単に既存のスポーツ施設やグラウンドのトラック、体育館などを活用するといった対処療法的機能整備のみではなく、競技種目ごとの特徴を踏まえたニーズを支援し、少なくとも高地トレーニングを有効とする競技種目全域までをカバーすることで、唯一無二の高地トレーニング拠点を形成することが可能になるといえる。

飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアの現状では、陸上競技を中心としたマーケットが想定されており、駅伝などの陸上競技（長距離種目）が利用者の9割を占めている。それに対して競合となる国内の高地トレーニングエリアでは、標高こそ飛騨御嶽高原エリアよりも低いものの、多種目を想定したマーケット想定がなされているため、施設設備はそれら種目に対応できるように整備が進められている。

そういった中で、今後飛騨御嶽高原エリアの利用者を増やしていくには、様々な競技目的や活動目的で活用できる工夫が必要となる。しかし、競合となる高地トレーニングエリアは多目的に対応した施設整備を行い誘致活動を展開しているため、元々マーケットボリュームの少ないアスリートから安定的に利用者を確保できるとは限らない。

そのため、スポーツ競技を対象とした「スポーツツーリズム」のみならず、マーケットボリュームが広い「ヘルスツーリズム」へのアプローチが求められる。

また、中高年のアウトドア活動拠点や温泉環境などを活用した「健康保養地」としてなど、従来までとは全く異なったマーケットの拡大が有効である。したがって、アスリートだけに特化したエリア機能だけでなく、それぞれの活動

内容に適した施設機能を整備することが求められることに加え、一般の方々が滞在することに対応する宿泊施設の拡充も必要になる。

2020年には東京オリンピックが開催されるため、すでに参加国のキャンプ地として活用される予定になっているが、それらを契機として高地トレーニング環境に対する関心が高まると考えられる。さらに、それらの活動やニュースが広く国内外へ流布することとなり、有効な広告宣伝になることで相乗効果が期待できるほか、さらなる積極的に対応することによって活動人口の増加が望めると考えられるため、国・県・市や各種スポーツ団体などとの有機的な連携を進めるべく、地域整備や交流人口(活動人口)促進に関する政策構築と実行が望まれる。

【註・引用】

- 1) 全天候型陸上競技施設：様々な気象条件下での使用に対応できるように、耐水性、耐熱性、耐衝撃性などを備えており、昼夜を問わずに使用できるといった性質を持つ製品や原材料を使用し整備された陸上競技施設。主にウレタン系の素材が使われることが多い。
- 2) フリーウエイト：バーベルやダンベルのように、運動する人の意思で、自由な方向に運動させることのできるおもりのこと。
- 3) ボルダー：アメリカのコロラド州に位置する高地トレーニング施設。
- 4) 昆明：中国雲南省の省都である。また高地トレーニング施設が中国のスポーツ強化拠点に選ばれており、日本人の利用も多くなる。
- 5) 「スポーツ王国ぎふ」づくり：平成2年度から平成21年度まで執行された岐阜県のスポーツ振興政策であり、スポーツ王国を目指して様々な活動が行われた。
- 6) サンモリッツ：爽やかな高地気候と晴天に恵まれたマウンテンリゾートであり、高地トレーニングが可能な施設が整備されている。
- 7) 医科学トレーニング機器：競技力向上を目的として、医療・科学の面からサポートすることが可能な機械。
- 8) コンディションチェック：高地順化及び疲労度、健康状態のチェック。
- 9) 高気圧キャビン：キャビン内で通常より高い気圧(1.1～1.3気圧)をかけ、高濃度酸素を摂取することで動脈血中の酸素濃度を通常の約2倍に高めることにより、生命活動に必要な不可欠な「酸素」を全身に十分に取り込むことのできる環境機器。
- 10) 低酸素室：気圧の低い環境を作り出せる施設。
- 11) 高酸素カプセル：カプセル内の気圧を標準気圧以上にする加圧装置を備えた健康機器。
- 12) エアロバイク：効率的に有酸素運動をすることができるトレーニング機器。
- 13) いやしの里・南飛騨健康保養構想：南飛騨(下呂市、高山市(一之宮町、久々野町、朝日町、高根町)、郡上市和良町、中津川市加子母地区)の豊かな自然や文化、温泉等の地域特性を健康・美容資源として活用し、ホリスティック(包括的・全体的)な健康観に基づき、心身の保養とリフレッシュを図る「健康リゾート」の形成を通して、人もまちも健康になる地域づくりを進めていく構想。

【参考文献】

- ・高山市/高山市自治体経営戦略調査等業務 現状分析報告書/平成25年12月/P5
- ・柳田 亮/小川洋二郎、水落文夫、鈴木 典、高橋正則、岩崎賢一/日衛誌/高地トレーニング合宿におけるトレーニング効果と圧受容器反射機能の関係
- ・後藤一成/競技力向上に向けた高地/低酸素トレーニングの最前線 シンポジウム/低酸素環境でのスプリントトレーニングの効果
- ・編集/浅野勝己、小林寛道/日本運動生理学会 運動生理学シリーズ/「高所トレーニングの科学」
- ・飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアHP
- ・蔵王坊平アスリートヴレッジHP
- ・御嶽濁河高地トレーニングセンターHP
- ・一般財団法人日本スポーツツーリズム推進機構/スポーツツーリズム・ハンドブック/2015年
- ・堀 繁、木田 悟、薄井充裕/スポーツで地域をつくる/2007年
- ・木田 悟、高橋義雄、藤口光紀/スポーツで地域を拓く/2013年
- ・村田周祐/空間紛争としての持続的スポーツツーリズム/2017年
- ・原田宗彦、木村和彦/スポーツ・ヘルスツーリズム/2009年
- ・首相官邸 政策会議/ホストタウン一覧
- ・岐阜県・清流の国づくり政策課/さらなる進化と成熟を清流の国ぎふ2020プロジェクト始動
- ・岐阜県・清流の国推進部地域スポーツ課/「清流の国ぎふスポーツ推進計画」スポーツによる地域振興
- ・岐阜県・総務部財政課/平成29年度当初予算の概要
- ・岐阜県・総務部財政課/平成30年度当初予算の概要
- ・首相官邸/「ぎふ創生」に向けて
- ・公益財団法人日本オリンピック委員会/ナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点一覧
- ・(独)国際交流基金 日本語研修センター/飛騨御嶽高原高地トレーニングエリアの合宿利用者状況

- 飛騨御嶽高原ナショナル高地トレーニングエリア推進協議会／平成30年度計画について
- 浅野勝己、小林寛道／日本運動生理学会 運動生理学シリーズ／高所トレーニングの科学